

“ミソガワソウ”の由来を検討する

橋渡勝也

Katsuya Hashido: Origin of the Japanese name 'Misogawa-sou'

1. はじめに

シソ科／イヌハッカ属／ミソガワソウは、日本固有の植物で、北海道・奈良県以北の本州・四国の低山帯上部から高山帯にかけての溪流沿いや湿った草原に生える多年草である。和名「ミソガワソウ」は、本県木曽地方の味噌川に由来していると言われている。味噌川は木曽川最北の支流で、木曽郡木祖村小木曽に位置している。

ところで、この味噌川流域において、これまでに私はミソガワソウを見ていない。この地域は、ニホンカモシカの生息環境調査(1976～1978)で幾度も踏査した場所であり、その後、縁あって木祖中学校に在職した間(1985.4～1988.3)および昨年(1994)も、見いだすことができなかった。ミソガワソウをさがすことだけを目的とした調査ではないから見落しもあったと思われるが、昔は多かったのに今は少なくなったのか。また、他の地域に行けばいくらかでも見られる場所があるのに、いつごろ、どのようないきさつで味噌川の地名が付けられるようになったのか。木祖

村誌編纂の基礎資料を得る目的で、これらの問題を検討してみることにした。

2. 図鑑にみる和名ミソガワソウの由来

手元にある図鑑で、ミソガワソウをひいてみると、昭和15年(1940)に発行された牧野富太郎著『牧野日本植物図鑑』には、「信州木曽ノ味噌川ニ産スルヨリ此和名アリ」とある。この図鑑はその後、前川らによって改訂され、日本名の語源も多く付け加えられ『牧野新日本植物図鑑』として昭和36年(1961)装いも新たに刊行された。ミソガワソウについては「木曽の味噌川に多く、旅人の目についたので味噌川草の名がある」と改められた。

その後発行された図鑑類を参照すると『牧野新日本植物図鑑』に見られる「味噌川に多いから」「人の目についたから」という内容に近いものがある—例えば、村田(1976)、高橋(1990)、邑田(1994)など。この表現については奥原(1985)が「味噌川には少なく旅人が通る所でもない」と、疑問を投げ掛けている。私も現地調査の結果から考えて同様の感

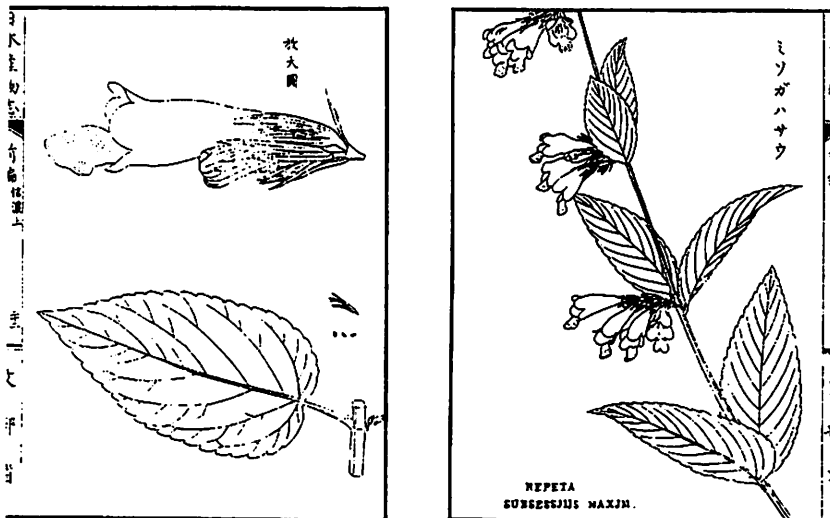


図1. 伊藤圭介著『日本産物誌』よりミソガワソウの図

Hab. in Japonia (Siebold! cui dedit botanicus japonicus sub nom. *Miso-gawa-sô*): Nippon principatu Nambu (Tschonoski! fl. fr. immat.).

図4. Maximowicz (1875) :Bull. Acad. St.-Petersbourg. XX P.469より

も括弧書きされている。そこで、Maximowiczの原記載に、さらに手掛かりを求めた。

4. 学名 *Nepeta subsessilis* Maxim.の原記載

Maximowicz (1875)の原記載論文を参照することができた。この記載から、もともになった標本は「日本の南部地方(岩手県)産で、須川長之助からもたらされたもの」であることが分かる。このことは、味噌川産の標本をもとにしたものではないということにもなる。

また、和名については、「シーボルトのコレクション、これは和名をミソガワソウと称するもので、日本人植物学徒からもらったもの」(門田私信による意識)と記されている。

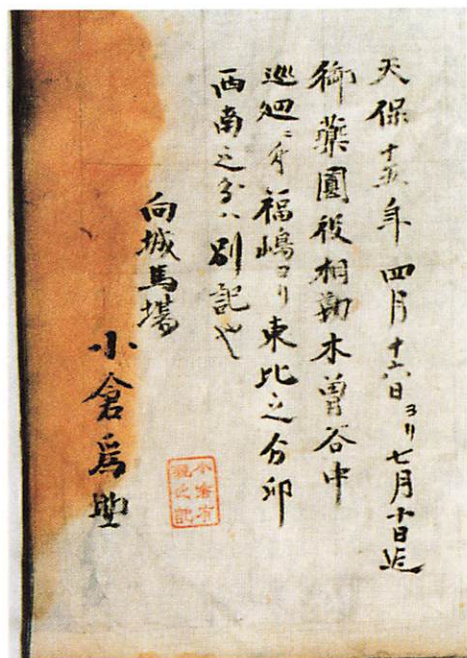
同じ頃発表されたFranchet et Savatier (1875)の記載も参照したが、Maximowiczの上記論文を踏襲したものとなっている。

Maximowiczの記述にある、「シーボルトに標本あるいはミソガワソウの和名を献上した『日本人植物学徒』』とは、いかなる人物であろうか。

5. 天保15年(1844)『木曾産草花根皮類』に見た味噌川草

これまで、ミソガワソウの由来を学名と和名の原記載をたどることで検討を加えてきた。その結果、Maximowiczの学問的正式発表の以前に既に和名ミソガワソウが存在していたことが明らかになった。そこで、今後は、味噌川を有する本祖村あるいはこの周辺の町村の古文書を参照する必要が出てきた。

そんなことを考えていた時、以前、木曾福島町で古い植物標本を見たことを思い出した。資料の中から、『木曾福島郷土館案内』というパンフレットを捜し出した。これには、「木曾代官山村氏とその文化」の展示として、天保年間に作られた植物標本の写真が紹介されている。写真では、見開きの冊子のように見え、黒百合などが写っている。もしかしたら、こ



写真、『木曾産草花根皮類』より(左:奥書き、右:最初の頁の味噌川草、撮影橋渡)

の中にミソガワソウがあるのではないか。そう思い立って、1995年2月12日、木曽福島郷土資料館へ出掛けることにした。

木曽福島郷土資料館でこの標本を捜していたところ、近くの山村代官屋敷に移管されていることが分かった。山村代官屋敷では、閲覧を快く承諾してくださった。

大きな展示ケースには次のような解説がある。「木曽産草花根皮類—花井卓美氏所蔵山村家の御薬草園役を勤めていた小倉為助が天保15年(1844)木曽谷中の植物調査をしこれを標本にしたもの…」

『木曽産草花根皮類』は、ガラスに蓋のついた桐の箱に収められ、パンフレットと同じ黒百合の頁が開かれていた。防虫剤が四隅に置かれている。静かに表紙を起こしてみると、濃青色の表紙紙は既に変色しているが、しっかりとした製本で、押し葉標本も、帯を使って丁寧に止めてあり、現在の標本技術に勝るとも劣らない。

扉を開けると、「木曽産草花根皮類」というタイトルが筆書きされている。そして、果たして、本文第1ページの右上に、味噌川草は掲載されていたのである。標本の横には「味噌川草」と墨の色も鮮やかにやや大き目の文字で。その下には「花ハ葉ノヨコエ出ル香イ多シ」と添え書きがある。

味噌川草は、Maximowiczが学名を正式発表し、伊藤が『日本産物誌』を著す30年程前には、既に木曽の地で知られていたことになる。

ところで、この調査の後、上記味噌川草の写真を見た奥原弘人先生から、「標本はラショウモンカズラではないか」との便りをいただいた。そこで、改めて長野県植物誌編纂委員シソ科担当の信州大学井上健先生に写真の同定をお願いした。信州大学の標本との照合による検討の結果、葉柄が短い点を除き、ラショウモンカズラに一致するとの返事をいただいた。小倉為助が、どうしてラショウモンカズラを味噌川草と同定したのかは、今後の課題としたい。

6. 尾張藩本草学と味噌川草との関係

『木曽産草花根皮類』に「味噌川草」の名が存在したことで、味噌川草が味噌川産の植物に当てられていたことが明らかになった。当時の本草学の流れから考察すると、味噌川草は、木曽地方を統括していた尾張藩の本草学者とのつながりの中で生まれたのではないかと仮説が浮かんでくる。

また、シーボルトに「味噌川草」を献上したとされる人物もまた、尾張藩の本草学者である可能性がある。このことに関して、有力な人物は、尾張藩の水谷豊文であろう。上野(1991)によると、「水谷豊文は蘭語を習得しており、文政9年(1826)2月、フォン・シーボルトが江戸参府旅行のため尾張国熱田を過ぎたとき、豊文はこれを迎えて学問上の知識を交換することができた。」とある。今後の調査は、水谷豊文の活躍した時代にさかのぼる。

7. おわりに

奥原弘人著『木曽谷の植物』(昭和47年)には、「味噌川谷のミソガワソウ」の写真が掲載されており、地区別主要植物の頁の小木曽地区の解説で、「味噌川谷の…上流にはフジアザミの群落があるほかオオヤマレンゲ・ワサビ・ハクサンハタザオ・サンヨウブシ・ハナウド・ミソガワソウ・ムカシヨモギ・フサガヤも見られる。」と記されている。少なくとも今から約25年前には、味噌川にミソガワソウがあったことが記録されているのである。

現在、味噌川下流には、味噌川ダムが建設され、間もなく中流まで水が蓄えられることになっている。味噌川に自生するミソガワソウが、今後も地元木祖村の宝となって後世に受け継がれていくことを願い、春を待って、再び調査を再開したい。また、和名ミソガワソウを最初に命名した人物や時期、薬草との関わりについて古文書にあたり、新たな地見が得られれば、次号で報告させていただくこととしたい。

謝 辞

これまで“ミソガワソウ”の由来の検討をすすめてきましたが、多くの方々のお世話に

なり、文献の参照・引用もさせていただきました。学生時代に味噌川谷と一緒に歩いていただいた神奈川県立博物館の高橋秀男先生には、ミソガワソウの由来に関して手掛かりになる諸論文を紹介していただきました。国立科学博物館の門田裕一先生には、原記載に関わる諸論文を紹介していただき、解釈についてもご教示いただきました。信州大学理学部の井上健先生には、文献の紹介や写真の同定をしていただきました。木曽の植物に詳しい奥原弘人先生からは、ミソガワソウの生育地など種々のご教示をいただきました。木祖村誌編纂室の澤頭修自先生には、植物調査や資料収集の面で便宜をはかっていただきました。また、山村代官屋敷では、資料の閲覧を許可していただきました。厚く御礼申し上げます。

引用文献

- Franchet, A. et Savatier, L. 1875. *Enumeratio Plantarum in Japonia sponte crescentium*. P.375, Paris.
- 原 寛 1948. 日本種子植物集覧, 215頁, 岩波書店.
- 伊藤圭介 1877. 日本産物誌, 信濃之部上, 21丁表～22丁裏, 文部省.
- 牧野富太郎 1940. 牧野日本植物図鑑, 178頁, 北隆館.
- 牧野富太郎 1961. (前川・原・津山編) 牧野新日本植物図鑑, 525頁, 北隆館.
- Maximowicz, C.J. 1875. *Diagnoses des nouvelles plantes du Japon et de la Mandjourie*. Décade XIX, Bull. Acad. St.-Pétersbourg. XX, P.469-470.
- 村田 源 1976. 世界の植物, 14号, 316頁, 朝日新聞社.
- 中井猛之進 1949. 東亜植物拾遺33, 植物研究雑誌 23: 18頁.
- 小倉為助 1845. 木曽産草花根皮類, 山村代官屋敷所蔵.
- 奥原弘人 1971. 木曽谷の植物, 25,75頁, 木曽教育会.
- 奥原弘人 1985. 木曽の植物, 219頁, 信濃毎日新聞社.
- 高橋秀男 (監修) 1990. 野草大図鑑, 292頁, 北隆館.
- 邑田裕子 1994. 植物の世界, 20号, 2-248頁, 朝日新聞社.
- 武田久吉 1959. 原色日本高山植物図鑑 (増補改訂版) 12頁, 保育社.
- 豊国秀夫 1988. 日本の高山植物, 188-189頁, 山と溪谷社.
- 上野益三 1991. 博物学者列伝, 102-104頁, 八坂書房.